

過去数年来の本校生徒会における制服問題へのとりくみ方は、試行錯誤を重ねながらきわめて徐々にではあるが、問題点を明らかにし、曲りなりにも前進の方向をたどってきたと言ってよいであろう。そうした過程の中で、50年度の動向にも正に新しい試行錯誤を通しての進展があったと思われる。

年度とともに制服賛成者の数が減り自由化賛成者の数が増えていることは事実である。しかしながら、この数字が、そのまま観念的で性急な自由化運動には結びつかないということを、または、現実的な問題について生徒が整然と意志統一して運動すれば一定の成果は必ず得られるということを、実証してみせたかのような1年間の動きであった。その事を端的に象徴するような出来事が、5月の3年生による遠足時私服の実力行使であった。3年生多数の不満と焦燥感に駆られた性急な行動は、その時に限っては一見示威運動としての効果を発揮し、また、一応の満足感や自信を当人達に味わせたとは思うが、まず行動への参加者・不参加者間の、また、生徒・教師間の問題を始め、1,2年生への影響、参加者内での感情の差異等の予想以上に種々の問題を生んだ。特に行動に参加した者の間に、その後の自由化運動を批判する態度が見られたり、1年生の反発、一般生徒の無関心を生む結果になったりしたことは、制服問題に限らず生徒会活動のあり方について重い教訓を残したように思われるのである。また、制服問題に関する議会・説明会・討論会などの機会に、主として3年生の自由化推進派が、1年生に自説を押しつけ、制服賛成者を責めるような態度をとりつけたことで、3年生の積極的な意図とは逆の結果を生み、生徒会活動そのものにまで1年生の熱意を失わせることになったのも同様の問題点である。さらに後期執行部が目標を制服自由化にしばって一気に生徒会をその方向にひっぱって行こうとしたことも同様である。

以上、反省すべき問題点について述べたが、評価すべき点としては、たとえば遠足時に実力行使を敢行したような強い要求とエネルギーを正当な方法で発揮して、秋季遠足・研究旅行・文化祭等における服装問題の改善を実現したような事例があげられよう。多数生徒にとって現実的関心の強い要求をとりあげ、民主的な手づきに従って要求実現の成果をあげ得た体験を忘れないようにさせたい。50年度生徒会の動向をふり返ってみるにつけ、49年度後期の総括としてこの稿の最初に記した指導上の留意点があらためて思い返されるのである。今後、51年度の具体的な指導に際しては、50年度に対立をきたした学年間の意識・感情の回復、生徒全体の声を反映するような生徒会活動の推進、制服賛成者の立場も尊重するような制服問題の検討等、

すべて基本的な事から再出発させるようにしたい。前述のように3学期の生徒総会で、3年生が次々に発言した反省のことばを、1・2年生はどのように受けとめたであろうか。体験からじみ出たようなあの訴えの内容を、生徒たちが活かしていくか否かが、今後の制服問題解決および生徒会活動発展の鍵になると言ってもよいであろう。

V 林間学校の諸問題

鈴木洋一郎

1. まえがき

本校が林間学荘を岐阜県下に開設し高校1年の学校行事としたのは、昭和36年であるから、既に15年の年月を送ったのである。10年一昔というが一昔半のこの間我々は何を期待し何をこの行事から得たのであろうか、当初印刷された「学荘要覧」では、この校外施設の利用計画を考えて実施されるべき次の六つを目標と考えたのである。

- ①生徒指導の場として ②登山・芸術活動
- ③実験・観察・見学・調査 ④読書・討論・労作
- ⑤小型の修学旅行 ⑥クラブなどの合宿

更に数年前、開校以来の中1の臨海学校の廃止に伴い、中2の行事としてこれを林間学校へ移行したのである。こうして現在は中高の行事として、7月下旬から8月上旬まで12日間、教官参加延数30名以上を動員し学校を挙げての行事へと発展してきているのである。

学校行事としての問題点

林間、臨海行事には、現在の学校教育内では体験されない多くの意義がある。学習指導要領の中のこの「学校行事」には旅行的行事と体育的行事の二面を兼有していると考えることもできる。しかし、次のような点は基本的性格として検討されるべき問題点であろう。

1. 林間学校行事は学校教育のものか

この行事は学校の「部」活動と同様に、学校教育内のものかについては世論として問題になってきている。修学旅行などのように学期中の「旅行的行事」と考えられるものか、多層化する生徒指導を目指すカリキュラムの中でいかに位置づけるかが問題となるのである。

2. もしも社会教育の領域の行事ならば

この行事がH・Rの校外指導という形でなくて、また教師の教科内指導の一つとしても実施されるものでなく、専門的な知識、指導技術を有する例えば、有能なキャンプカウンセラーのような指導者のもとで、計画的に実施されるべきでないかということである。教官アンケートによても学期内（休暇前）に実施すべき意見が多数を占めている。夏休みの半分にも近い日

数をこの行事とすることには、問題があると言いうる。

2. 行事の現状と評価

林間学校は中学高校ともに学級を中心とした準備と林間活動で、これには従来一つのパターンがあった。

○準備について

①学級担任によるオリエンテーション

原田教官作成の「林間学校指導手引」により、H・R内にて指導している。

②学級別実施計画作成

学級の特色を生かしたもののが、担任指導のもと自由に計画された。

③グループ単独の活動計画

生活班として学習行動班の単位としてのグループの活動も計画される。

○実施　日程骨子　　(中学は第二日の計画ない)

第一日 (学校出発)輸送、現地での環境整備

第二日 オリエンテーリング形式のグループハイキング

第三日 グループワーク 現地の地理的・社会的・自然条件を利用した研究活動

第四日 環境整備、輸送(帰校)

評　　価

行事後、教官の反省や生徒の感想などを総合すると大体次のような結果である

- 印象のよかったものとして……グループのハイキングやレクリエーションのようなもの。また出発前の諸準備をグループ毎にすることなど。

- 問題を残し、反省の要あるもの……人間関係、特にグループ内における非協力、利己的な行動への批判がつよくなされている。討論や反省会(ミーティング)観察、採集、見学などの行動についても積極的な活動が余りないようだ。全体的に、楽しみ、遊びという意識がつよく出ており、団体訓練における基礎ルールを身につけようという意識が薄いようである。

また、中学の林間学校生活を指導した教官の感想から抜粋すると、

1. 学舎へ着く途中で…「天気が良いので地蔵峠などの眺望は絶好、しかし生徒の反応は期待したほどではなかった」
2. 現地での散歩「珍しい植物などを見せてもらふ生徒の感動はうすい。いったいこの子らは、どんなことに感動するのだろう。」
そして食事準備には手間どり、ごはんもうまくたけた班は皆無としている。しかし
3. 夜の星座観察について「多くの星座を覚え、特に流星が多いので、あゝ見えた!!という叫び

が随所に聞かれ、関心を示した。

生徒指導上の問題点

林間学校の生活は、生徒にとって高校3泊4日、中学2泊3日で往復の時間を考慮すれば、前者は中二日後者は中一日という短期間であり、多忙な行事である。この間に多くの目標を実践するのは所詮無理かも知れないが、生徒指導上の諸問題を挙げてみると、

1. 行動単位を学級において指導するのは適当か。

この行事がH・R単位で実施されているので、準備計画、実施など特にH・R担任の責任と指導は過大となっている。現地での生活指導は全時間、担任に期待される結果になっている。そもそも生徒の非行が突発すれば——その可能性はないとは言えないのだが——その時の指導責任をもつ結果になっている。生活スケジュールの決定にも担任の役割は大きすぎる。

2. 教師集団の指導体制は十分になされているか。

学年単位で行なう修学旅行の場合の「旅行委員会」のようなものは特にない。参加教官は、担任正副、学荘管理、山歩き指導、連絡、衛生とに分かれ、5～6人の教師集団で指導するが、これらの教師集団のもつ生徒指導の役割が明確にされていないし、その指導の大半は学級担任に任せられている。

例えば、各回に有能なキャンプカウンセラーという専門家に配属されていて、レクリエーションの健全な指導なども期待されなければならない。

3. 実施(使用)期間に問題はないだろうか。

本校生徒の学舎使用期間は7月26日～8月8日の12日間である。別に届出があれば8月中旬以後の夏休み中にも若干利用日はある。在校生徒は、高1、中2に限定し、2泊ないし3泊の利用のほかは、1年中殆ど利用されず、空家同様になっている校外施設には問題はないだろうか。自然に接する機会の少ない都会っ子に、夏の自然の外、春や秋または冬の自然の美に触れさせるような計画があって始めて学校教育では得られない体験、その体験の中から生活、教科指導も考えられる。本格的にもっと長期的にこの校外施設の活用をなさるべきであると思う。

4. 指導内容について検討の必要はないだろうか。

高校ではグループハイキングとグループワークを中心として、夜のレクリエーションと食事が、林間学舎での主要日課であることは前述の通りである。数時間にわたるハイキング——これは地図をたよりに全員参加のオリエンテーリング式の山歩きで、未知の土地、不案内の山路、のために事故の突発も予想される。グループワークも目標を定め十分の準備のもとで実施し、その結果はミーティングで報告し指導すべきものだろう。夜のレクリエーションも

学校教育の対象からは問題はあるのではないか。H・R 担任に期間中の指導を期待したり、また生徒の自主的なプランだけには現在は無理がある。食事準備一ハンゴウ炊さん——にも相当時間がとられている。短時間の行事の中で余りにもこの時間の占める位置は大きい。特に中学の場合は初経験で、あと始末などでスケジュールが遅れがちである。この時間もレクリエーションとする考えもできるが活用の道を見出したいものである。

3. あとがき

林間学校の目標が高く掲げられているのに対し、その成果が不十分であるのは何か、今まで挙げた諸問題もその理由であるが、これらの対策と今後の問題点を二、三述べてみたい。

まず、H・Rの校外活動として担任の負担の大きい、この行事を、教師集団の指導体制に切りかえることである。そして、高校の三回にわたる行事を二回にし、泊数も4泊と一日増やすことである。これは一つの提案であるが、H・R内での狭い人間関係を越えて新しい友情も生まれ新鮮なグループ活動を自主的に実行する可能性が生れるものと思う。やや惰性的になっていた友人（グループ）からも解放され、キャンプ内での生活にも規律さが見られ、グループ日誌、キャンプ日誌などで生活の行動を反省させる機会をつくることもできよう。

余暇の善用を積極的にさせたい。林間学校での余暇の利用は生徒が自主的に計画し実行するのが望ましいが、現地ガイドつきの登山指導（希望者に限る）や全員のテーマ別討論への参加、また奉仕活動などを予め計画されるようにする。

合宿は学校教育の中でどういう位置を、占め、意義があるのだろうか。我々教師集団の中にも討論が十分でなく相互のコンセンサスを得ていない、しかし教師生徒の人間関係は教室内の教壇の上からは発見されないもので、教師がつくったプランと、生徒がつくったプランをと相互に重ね合わせ、生徒の主体性を活かしつつ生徒とともに実行してゆくところに、相互理解も生まれ、生徒相互の人間関係のよいアドバイザーとなるものであると思う。

VI 家庭教育と学校教育の接点

白井 宏

生徒は、家庭と学校とのよき協力関係のもとで成長していくものである。しかし現実に、その協力関係が円滑良好にいっているとは必ずしも言えない。P.T.A.という組織が、その本来の機能を果し得ず、学校に対

する財政援助機関になり下っていたり、学校に対する不当な圧力機関になっていたりする。自分の子供のことには熱心であるが、他の子供のこと、学校全体・教育全体という大きな見方が出来ず、それぞれが孤立しばらばらである親達、P.T.A.は何か自分とは関係の無い別物の組織であると考え、無視、無関心である教師達、さらにそういう現状を改善することに消極的であり、ある場合にはそれを利用しようとする傾向さえ見られる教育行政の問題、根は深いと言わねばならない。

さらには、そういうものの全てを覆う「受験体制」という重圧、それが産み出す競争、選別という効率本位のものの考え方、悪しき意味での功利主義的社會風潮にまで考えを拡げて行くと、絶望的ですらある。われわれはそういう状況をどのような点から切り拓き、変革して行けばよいのか。現実の小さな具体的な問題を大切に拾いあげながら検討して行くこととしたい。

現実 その1 一学校の問題

環境調査表 新年度に必ず全生徒に提出させる。これには大きく2つの問題があるように思われる。

その1つは、記載させる項目の中に不必要的ものが含まれているのではないかということ。つまり、親の学歴、副保証人等である。親の学歴は本人の教育には関係が無いばかりか、その記述によって、無意味、有害な優越感、劣等感を生み出したり、教師の先入観が形成されないとは言えない。又、副保証人は、保護者が学費支弁不能になった場合の保証のために書かせるものであろうが、まず必要がないと思われる。

次に2つめは、これだけ懇切丁寧に書かせた環境調査表を、学校側はどれだけ利用しているかということである。全く利用していないとは言えないが、もっと活用されてもよい。筆者は数年前に家庭訪問を行ってみた。本校は制度化も義務付けもされておらず、そのうえ通学範囲が相当な広範囲であるため、休日毎に1日4～5軒ずつしか訪問できず、かなりの期間を要したが、しかし環境調査表の記述が現実的ふくらみを持ち、本当の意味の環境調査には大いに役立ったと言える。ただ家庭訪問には、そういう成果と同時に、違った意味の問題点が無いとは言えない。

父兄個人面談 本校では夏休み、冬休みのそれぞれの初めに実施している。たとえ20分か30分でも、保護者と教師が個人的に直接話をすることは、意味があることであり、このこと自体に疑問を持つわけではないが、それを認めつつもやはり若干の問題をも同時に感じないわけにもいかない。

その1は時期の問題である。何れも休暇に入つてから（そう決められているわけではないが）行う習慣があるので、担任教師にとってはかなりの負担である。又、夏休みはともかく、もう1回は、年度初めか、あ